ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　雅也とジャックは、静かに見つめ合ってた。だがその眼に写る感情は、互いに違う。雅也はようやく会えた宿敵に燃え、ジャックは少し驚いたような思いを目に乗せるも、今はただ道端の石ころでも見るような、そんな目で雅也を見ている。

「……また君？　それにしても、生きてたんだ」

「……うん」

　言葉を交わした瞬間、ガブリアスの姿が消える。風を切る音が雅也の耳を掠めた。いつの間に、と雅也が驚愕に体を硬直させていると、くぐもった声が後ろの方から聞こえた。

「――っ！　ルカリオっ？」

　振り返るとそこには、木の下で目を蹲っているルカリオがいた。腹には大きな打撃痕。ガブリアスの姿は見えないが、どうやら強烈な一撃を受けて吹っ飛んだらしい。

「おい、坊主！　早く逃げろ！」

　遠くで、さっきまでジャックにやられてた大学生の悲痛な声が聞こえたが、雅也は無視してルカリオの元へと駆け寄る。

　だが、後数歩という所で、今まで消えていたガブリアスが雅也とルカリオの間に現れた。

(随分な……スピードだな！)

　ルカリオが声を振り絞ると、ジャックは口角を少し上げた。ゆっくりと雅也の方へと近づいてくる。何をするつもりなのかと、雅也とルカリオは身構えたが、それを気にする風はジャックには無い。

「ふぅん？　君、言葉が話せるんだね。何で？」

　どうやらジャックは、人間の言葉を話せるルカリオに興味を持ったようだ。止めを刺す前に、その謎くらいは聞いておこうと思ったのだろう。ジャックも、人の言葉を話せるポケモンを見るのは初めてのようだ。同じくガブリアスも、興味深そうにルカリオを見つめている。

　だが、これは雅也達にとってもチャンスだった。相変わらずジャックとガブリアスから放たれる威圧感は凄まじいものの、この一瞬は、微かにそれが弱まったのだ。ジャックの意識が、『攻撃』から『質問』へと切り替わったからだろう。

　そしてこの一瞬を、奇跡的に彼等は逃さなかった。

「……？」

　オレンジ色のエネルギー弾がルカリオの背中から放たれる。それは木の後ろ側を通っているために、ジャックとガブリアスからは見えないし、気づけない。このルカリオの放った『波動弾』が、あまりにも弱いものだったからだ。いや、正確にはジャックもガブリアスも、その存在には気がついていたというべきか。

ただ彼等には、それがどういったものなのか、気にも止めなかった。木の上にポケモンが登っていったのだろう。その程度にしか思っていなかったのだ。

だから、ジャック達は気が付くべきだった。自分達がどのような存在なのか。戦っている時の彼等が出す威圧感は、野生のポケモンを寄せ付けるはずがないのだ。

「……？」

　ジャックとガブリアスがルカリオが何かしたのだと気がついたのは、空から大量の葉っぱが降ってきた時だった。彼等の顔が、一瞬だけ空へと向かう。

　そしてその隙に、雅也は二つのボールを足元に転がした。

　次の瞬間だ。

「……！」

　目の前を舞う葉っぱに火がついたと思ったら、ジャックとガブリアスの周りには、視界を覆い尽くす程の大量の黒煙が立ち込めていた。

「ガブリアス！」

　慌てることなく、それでも急いでガブリアスに向かって声を飛ばすジャックだが、主人の指示を予想していたガブリアスは、既に行動していた。耳を貫くような轟音が響き渡り、周囲の黒炎が全て吹き飛ぶ。これは、ポケモンの技などでは無い。ただ一つ吠えただけで、ガブリアスは周囲の煙を振り払ったのだ。ガブリアスの近くにあった木の中には、少し傾いているものもある。凄まじい力とはこのことだろう。

　しかしその時には既に、ジャック達の視界からは――

　さっきまで襲っていた大学生とカビゴンはおろか、雅也とルカリオの姿は消えていた。

「こ……ここまで来れば大丈夫かな？」

(……だろうな)

姿を消した雅也達だが、彼等は今、さっきの所から少し遠いところにある洞窟の中にいた。

「……助かった」

　近くには、大学生の男の人もいる。五分刈りのお兄さんで、今は胸の所に大きな切り傷を負っていた。ガタイは良く、田島辰巳にもひけを取らないといっても過言では無い。彼の手持ちであるカビゴンは、既にモンスターボールの中だ。

　ここまで逃げ切れたのは、ほとんど奇跡と言ってもいい。元々雅也達は、こんな所に隠れられるなんて思っていなかったのだ。ジャックの目を眩ませられたのは雅也達の力故だが、安全そうな所まで来れたのはお兄さんのお陰である。

「いえ、こちらこそ」

(ええ。あなたのお陰で、ここまで来れました。礼を言わせて欲しい)

それは雅也もルカリオも分かっていたので、素直にお礼の言葉が出た。ちなみに雅也達の背中は冷や汗が凄いことになっている。ジャックから逃げるために、一世一代の大勝負に出たのだ。無理もないだろう。

あの時ルカリオは、木に生い茂っている葉っぱ目掛けて『波動弾』を放った。降ってくる木の葉に、ジャック達が気を取られることにかけたのだ。目論見通り上を見上げた隙に雅也はリザードとカメールを足元に出し、リザードはその葉っぱに火を付けた。辺りは炎に包まれるが、それは当然リザードも理解していた。雅也の服の端は少し焦げていたり、ルカリオが軽く火傷しているのだが、それは火の海の中にいたためである。

だが炎に包まれていたのも一瞬だった。カメールが水を吐いて、火を消したからである。消えた炎の代わりに、辺りには黒炎が立ち込め、その隙にルカリオが雅也を担いで煙の中から脱出したのだ。リザードとカメールは、その時忘れずにボールに戻してある。

そのままルカリオはお兄さん達も担いで逃げる予定だったのだが、運のいいことにお兄さんは『テレポート』の技を使えるポケモンを持っていた。雅也達が何をやろうとしていたのか、遠くで見ていて分かったのだろう。カビゴンをボールに戻し、代わりにその技を使えるポケモンを出していたのだ。ルカリオ達が近づいた瞬間、ここまでテレポートしてきたのである。

さっきのジャックで深手を負っていたらしく、テレポート出来たのはここが限界だったのが悔やまれる所だが、ここまで逃げてこられただけでも上出来だろう。何はともあれ、こうして彼等は今ここにいる、というわけである。

ところで、お兄さんはルカリオが人の言葉を話しても驚かない。いや正確には、さっきジャックと話しているのを聞いて、既にギョッとした後だった。

「お礼なんてそんな……俺一人じゃ、何も出来なかった。いいようにやられっぱなしだったからな」

　そう言うと、お兄さんは弱々しく微笑み、溜息を吐いた。自分より明らかに年下の男の子に助けられたのが、情けなくて仕様がないのだろう。雅也達は毎日修行しているので、そこら辺の大人よりよほど実力はあるのだが、当然彼は知らない。

　だが、自分が溜息を吐いた事に気が付いて、慌てて首を横に振った。小さな子の前で、不安にさせるような仕草をすべきではないと彼は思ったのだ。

　そして、これからどうしようかと考えていた雅也達に、強ばってはいるものの、できる限りの笑顔を見せる。

「俺はだ。よろしくな」

　そう言って、お兄さんは雅也達に手をさしだしてきた。